［写真提供：中野英治（彦島向井町）］

遷宮で結ぶ人の輪・心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

産土

彦島八幡宮社報
第40号

どんど焼き～古来より伝わる火祭りの伝統～

正月を迎えるにあたり家庭に注連飾、松竹梅、門松といった正月飾りを飾られたことであろう。一月七日（人日の節句＝五節句の一つで七草粥を食す）もしくは一月十五日（小正月＝元日の大正月に対しての事を言い年が明けてこの日までが松の内である）に取り外し、どの家庭も直接的或いは間接的に『どんど焼き』に接するのではないだろうか。

どんど焼きは今日様々な呼称・形態で伝えられているが、元来、小正月に刈り取り跡の残る田などに長い竹を数本組んで立て、そこにその年飾った門松や注連飾り、書き初めで書いた物を持ち寄ってお焚き上げする行事である。同時に大神様からいただいた御神札や御守に感謝を込めて古守札のお焼納を執行するという意義がある。

都市部では神社仏閣をはじめとする境内や校庭や公園などの公共施設で執行してきたが、近年環境等の配慮により規模縮小や廃止など減少傾向である。忌火で焼いた餅や団子を食したり、注連飾りなどの灰を持ち帰り自宅の周囲にまくとその年の病を除くと伝えられる。また、忌火や煙にあたると長寿健康や書き初めを焼いた時に炎が高く上がると字が上達するなど様々な伝承がある。

歳神様や祖霊を迎える行事の多い大正月に対し、小正月は五穀豊穣豊作祈願などの農業に関連した行事や家庭的な行事が中心となる。その一つが、どんど焼きであり、その年の無病息災を願う火祭りでもある。民俗学的な見解は、門松や注連飾りによって出迎えた歳神様を、忌火でお焚き上げすることにより炎と共に見送る意味があるとされる。お盆にも火を燃やす習俗があるが、こちらは先祖の霊を迎えたり、その後送り出す民間習俗が長い年月を書け様々な文化と混合したものと考えられている。

「どんど焼き」の語源については、火が燃えるのを「尊（とうと）や尊（とうと）」と囃（はや）し立てたことから、その囃し言葉が訛った説と、どんどん燃える様子からそれらの名称がついた説があります。

一方、起源についてはどんど焼きの別称『左義長（さぎちょう）』との関わりがあると考えられている。平安時代の宮中行事である。それを裏付けるのが平安時代の仁明天皇承和元年（八三四年）、鎮護国家・五穀豊穣を祈る祭として、宮中 清涼殿（天皇の日常居住）の東庭で青竹を束ねて立て毬杖三本を結び、その上に扇子や短冊などを添え、陰陽師が謡いはやしながらこれを焼いたという行事があり、その年の吉凶も占ったとされる。これは当時の山科家（藤原北家四条流の由緒ある公家）などから進献された葉竹を束ねたものを清涼殿の東庭にたて、そのうえに扇子、短冊、天皇の吉書などを結び付け、陰陽師に謡い囃して焼かせ、天覧に供された。江戸時代中期の儒学者 篠崎東海著の『故実拾要』によれば、まず烏帽子、素襖を着た陰陽師大黒が庭の中央に立って囃をし、ついで上下を着た大黒二人が笹の枝に白紙を切り下げたのを持ち、立ち向かって囃をし、ついで鬼の面をかぶった童子二人が金銀で左巻に画いた短い棒を持って舞い、ついで面をかぶり赤い頭をかぶった童子二人が大鼓を持って舞い、ついで金の立烏帽子に大口を着て小さい鞨鼓を前に懸け、打ち鳴らしながら舞い、また半上下を着たものが笛、小鼓で打ち囃す。毬杖（ぎっちょう）三本を結ぶことから「三毬杖（さぎちょう）」とも呼ばれた。

このように長い伝統のあるどんど焼きであるが、神様に感謝を申し上げる、祈りを奉げる神事、まつりごととして今日に伝えられる。都市化の進行や環境配慮など問題が山積している現状もあるが、地元地域との調和を崩さないどんど焼きのあり方を考えて、後世に火祭りの伝統を残していかなければならない。

【彦島八幡宮どんど焼きのお知らせ】

＊日　　時　平成二十三年一月十六日（日）午前十時～午後四時

＊注意事項　本年より一月三日節分祭のどんど焼きは執行致しません。
必ず一月十六日（日）までにお納め下さい。

どんど焼き以降、正月飾は原則として受け付ておりませんので、粗塩にてお清めされ来年のどんど焼きまで各自で保管して下さい。古札や古い御守、縁起物は随時受け付けております。何卒ご理解ご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

宮司プレス 第五十五号

彦島八幡宮　宮司ニュース
発行者　彦島八幡宮
宮司　柴田　宜夫
発　行　平成二十二年十二月一日

◇宮司の柴田です。

神門下の参道脇の「もみじ」が、例年にも増して紅の色が鮮やかなようです。それは、寒暖の差が激しかった事が、奏功（そうこうと読みます、物事がうまくいった事を意味します）したようですね。境内を吹き抜ける冷たい風は、せっかくの紅に染まった葉も落としつつ、容赦なく体温を奪います。冬の到来を感じさせる昨今です。

いつもこの時期に、思い出す言葉があります。「以春風接人（春風をもって人に接し）以秋霜律己（秋霜をもって己を律す）」という言葉で、春風のようなさわやかさで人に接し、秋の霜の厳しさで自分に向き合うという教えです。「人に優しく、自分に厳しく」ということでしょうか。なかなか出来る事ではありませんが、人として生まれてきたわけですから、やはりそのような「めあて」が、大切ですよね。神様へのご奉仕は、秋の霜の厳しさ、参拝者へは春風のようなさわやかさ、これこそが、神様と参拝者の仲をとりもつ、「仲取り持ち」としての宮司の大切な役割だと考えています。日毎、月毎、季節毎、年毎の「祭り」を通して、神様につながり、人と人とにつながり、地域社会につながっていくわけです。まさに、神社神道は、「つながりの宗教」なのですね。

◇さて、時は、早く流れて今日から十二月です。十二月は「師走（しわす）」といいます。十二月は、一年の終わりでみんな忙しく師匠といえども趨走（すうそう、ちょこちょこ走る意味）するので、「師趨（しすう）」となり、転じて師走となったとするのが一般的です。また、師走の師は法師を意味し、年末にお坊さんを家に招いてお経を読んでもらう風習があったことから、師が馳（は）せ走る「師馳月（しはせづき）」であり、これが略されたものであるという説もあります。いずれにせよあわただしい年の瀬なのでありますね。

◇少し、気が早いのですが、来年の平成二十三年を干支（えと）で占ってみましょう。

平成二十三年は、辛卯（かのとう）の年であります。昨年に引き続いて、金、鉄の支配する年回りではありますが、今年は、柔らかい金属です。砂鉄、砂金、今、一番必要とされるレアメタルもそうですね。辛は、「しん」と読み、新しいという意味です。草木が枯死（こし）して、新しくなろうとしている状態です。卯は、「ぼう」と読み、「茂（ぼう、しげるという意味）」、「冒（ぼう、おおうという意味）」で、草木が発生して地面を覆うようになった状態です。動物では、兎（うさぎ）があてられていますが、兎は、活発で敏捷（びんしょう）な動物です。「兎の登り坂」ということわざは、兎は、上手に坂道を登る事から、もっとも得意とする場所で力を振るうことの例えです。また、「兎を見て犬を放つ」ということわざは、状況を見極めてから対策を講じても遅くないという例えです。

◇それでは、この干支の組合せから、今年の展望を試みましょう。まず、我々の生活全般における不安や不安定な要素が、枯れてなくなり、安心、安定で覆いつくされた生活が、新しく始まる年になって欲しいと思います。そして、その新しく始まる年には、状況をよく見極め、得意とする分野に力を注ぎながら、柔らかい発想で、たとえ道は険しくとも上手に坂を登り、右肩上がりの「上り坂」になりたいものですよね。「辛」、これは、「辛（つら）い」とも読めますね。実は、「辛」の「立」の漢字の「丶」を伸ばして、のばした「丨」に、数字の「二」を加えて、「土」にして、「辛」に戻し、さらに「い」にも「二」を加えると、「辛い」は、「幸せ」になりますよ。（宮司プレス三十七号にも詳しく書いています。）しっかりと、一歩を踏み出し、状況によっては、兎にあやかり、大きく跳ばなければ「幸せ」は来ないのですね。

◇実は、再来年は、「辰（たつ）」の年です。来年と再来年は、「卯辰（うたつ）」の年となります。中国の龍門という滝を、鯉が昇りきると龍になるという伝説があります。出世するきっかけの事を「登竜門」というのは、この故事がもとになっています。日本では、ご承知のとおり、「鯉のぼり」として、男子の出世を願う端午の節句となっていますね。今年から来年にかけて、兎が「ホップ　ステップ　ジャンプ」、と大きく天に舞い上がり、龍となる「昇龍」の年、大出世の年、「卯（うだつ）の上がらない年」ではなく、「卯辰（うだつ）の上がる年」になり、回復を心から願うものです。

◇失われた二十年を経て、経済の低迷は依然として続いています。民主党政権になりましたが、内外を問わず問題は山積しています。アメリカのジョンFケネディ大統領は、「物をなくすと小さいものを失う　信頼をなくすと大きなものを失う しかし、勇気をなくせば全てを失う」と言われました。どんな時にも神様が守って下さるという、「神信心（かみしんじん）」という勇気をなくさずに生活したいものですね。御多幸をお祈り申し上げます。

宮司プレス総集編

※平成22年下半期（6月～11月）発行分を総集編としてお届けします。
掲載紙面の都合上、中略しています。
全部ご覧になりたい方は、彦島八幡宮ホームページへアクセスして下さい。

第四十九号

今月号は、とうとう今日になってしまいました。四十九号だけに、四苦八苦してしまいました。通常は、どんなに遅くても、朝粥会開催日である二十一日には、発行していました。それは、朝粥会の折の講話は、この宮司プレスの内容をお話するからです。いわば、この宮司プレスの発行は、朝粥会の講話の話題作りをも兼ねていたわけですね。発刊史上で、最も遅い発行日、ワースト記録をぬりかえてしまいました。五十号との合併号にしようかと迷いましたが、発行にこぎつけました。

皆様、お待たせしました。御祈願の奉納をされた方にも、礼状と一緒に同封して郵送していますが、五月に御祈願を奉納された方には、礼状も遅れています、お詫び申し上げます。当然ながら、ホームページの更新作業、アップも遅延しておりまして、重ねてお詫び申し上げます。何事も、「創業は易（やす）く守成（しゅせい、創業を守り事業を引き継ぐ事です）は難（かた）し」でありますね。継続は難しく、だからこそ力となるのでしょう。遅延しているうちに、御神殿周辺の、今は亡き先代典行宮司が植えた紫陽花（あじさい）の花が満開です。六月は、水無月（みなづき）といいますが、まさしく、水の月であります。ゆく水の再びかえらぬように、先代典行宮司が逝去したのも六月の事でありました。過日、五年祭を御奉仕申し上げましたが、先代を偲（しの）ぶかのように、時折、激しく降りしきる雨にも花を落とすことなく、濃い紫や薄い紅（くれない）、そして、鮮やかな水色と咲き乱れています。

◇一人の人間は、弱くてですね、「自律（自分をコントロールする）」「自立（自分だけで物事を行う）」「自己責任（自分で責めをおう）」、の重さに耐え切れなくなってしまった時に、勝手な行動をしてしまいがちです。その気持ちを抑える強さである、抑止力を持つ必要があります。日本人の抑止力とは、何でしょうか。

欧米やイスラム教の国々の抑止力は、全知全能（ぜんちぜんのう）の神様、絶対の神様である「イエスキリスト」や「アラーの神」であります。実は、明治以前は、「一族主義」でありました。血縁関係でむすばれた一族が、運命共同体として機能していました。明治時代になると、「世帯主義」となり、家を大切にする方針がとられました。戦後、大きくパラダイム（枠組み）が変った日本は、個人主義に大きく方向を転換したのです。家庭にある神棚や仏壇を通して、目には見えませんが、神様や御先祖様が、日本人の抑止力だったのではないでしょうか。「お天道様に顔向けが出来ない、御先祖様に申し開きが出来ない」これが、勝手な行動を止めさせる抑止力だったのですね。

◇「村八分（むらはちぶ）」という言葉をご存知ですか。「村八分」と聞くと、陰湿（いんしつ）な苛（いじ）めや、付き合いを断絶するイメージがおありでしょう。非民主的とお感じになるでしょう。しかし、全てを断絶するのではありません。村には、十の付き合いがありました。出産、成人、結婚、病気、葬式、法事、火事、水害、普請（家を建てる事）、旅立ちです。これを「村付き合い十」といいますが、どんなに絶交しても完全に絶交してはならないものが二つありました。何かというと「火事」と「葬式」です。この二つだけは村の人が助けてくれるが、あとの八つは分（ぶ）にする、断絶、絶交するから「村八分」なのです。いいかえれば、村八分になった人は、勝手な行動をしたから、そのような仕打ちを受けたのですが、反省をして、侘びを入れたら、いつかは、村の共同体へ復帰できる道が残されているのです。素晴らしい共同体のシステムですし、見事な抑止力と思いませんか。現代社会は、「村十分（むらじゅうぶ）」、断絶された社会となってしまったのですね。目には見えないけれど大切な、お天道様や御先祖様に感謝を捧げつつ、どんな時にも勝手な振る舞いをしない、強さ、抑止力を身に付けたいものですね。いよいよ七月を迎えます。御自愛下さいましてお過ごし下さい。

第五十号

今月号で、記念すべき第五十号を迎えました。先代の後を引き継ぎ宮司に就任したのは、平成十七年の七月の事でしたが、一念発起（いちねんほっき）して第一号の産声を挙げたのは、就任二年目の平成十八年六月の事でした。名称については、「宮司ニュース」とか「宮司かわらばん」とかいくつかの候補もありました。宮司という神社特有の役職名が冠に付き、多少かたくるしく感じますので、思い切って新聞とか印刷機という英語である「プレス」をくっつけました。「宮司プレス」として誕生したのでした。

宮司の新聞という意味と、自分でパソコンを駆使し、輪転機で印刷をする、それから、「宮司の居場所」「素晴らしい場所」になって欲しいという願いを込めて、場所の英語「プレイス」にも引っ掛けています。

◇月に一回の発行を丸四年間継続した事になります。一番早い発行日は、いうまでもなく一日でありますが、遅いワースト記録は、とうとう先月更新してしまいましたが、二十九日です。プレスはプレスでも、発行に関して超特急を意味する「エクスプレス」には及ばない、普通列車の「ローカル」のようです。内容については、当宮のローカルな話題も含めて、季節の歳時記や日本古来の伝統的信念について、わかりやすく取り上げてきたつもりです。「宮司プレス」は、変えてはならない、不易（ふえき）の名称宮司、そして、いろいろな意味を持つ英語のプレス、「温故知新（おんこちしん）「稽古照今（けいこしょうこん）」、伝統文化を大切にしながら、新しい時代や考え方にも柔軟に対応したいという思いで編集しています。

◇七月は、文月（ふみづき）といいます。七月七日の七夕（たなばた）行事に、詩歌を牽牛（けんぎゅう）織女（おりひめ）の二星に献じたり、書物を開いて夜気（やき）にさらす風習があるので文月という説があります。また、稲の「穂含月（ほふくみづき）」や「含月（ふくみづき）」が省略されて「文月（ふづき）」となった説もあります。

◇実は、私の誕生月も七月です。昭和三十七年七月二十七日の午後三時に出産しました。空調設備の整っていない自宅の座敷でのお産、母は生死をさまよい、産後は顔がむくみ危険な状態であったそうです。「人は、目には見えないけれど何か大きな力によって、生かされて生きている。」というのが、その母の口癖（くちぐせ）で、「生かされて生きる」というのが、私の心のよりどころ、縁（よすが）であり、先月号に記しましたが、私にとっての「抑止力（よくしりょく）」となっています。

◇今月の二十七日で、満四十八歳を迎えます。

平均寿命からしたら、私の余命（よめい）は、これまで生きてきた時間よりも短くなるのかもしれません。この余命という言葉は、一生の終りに近づいている命の事ですよね。何か寂しさや陰気な感じがしますよね。先日、作家の藤本義一さんのエッセイを読んでいたら、「余命」ではなく、与えられた命の『与命（よめい）』にしたらどうか」と書かれていて、目から鱗（うろこ）です。人は、誰しも命を与えられているのですよね、ですから、その限られた命の中で、生かされて活き活きと生きる事が、大切なように思います。だから、「生活」なのでしょうね。命がけで私を産んでくれた母に報いる為にも、一日一生（いちにちいっしょう）の思いで日々、感謝の心を忘れずに過ごしていきたいと、気持ちを新たにしています。

◇来月の十五日は、終戦記念日ですが、戦後すでに六十五年を経過しました。戦後、パラダイム（枠組み）が大きく変り、日本人らしい心が、失われつつあるように感じます。「幸せは、物がゆたかになる事」という思いで、復興の道を急いで歩んだ産物でしょうか。過剰なまでの競争と能率主義、成果主義、市場原理主義によって、年功序列（ねんこうじょれつ）や終身雇用（しゅうしんこよう）といった、稲作文化で培われた日本古来のシステムをも否定され、その結果として、やはり「格差」が広がったように感じますね。国際的な免疫（めんえき）学者の多田富雄さんは、「美しい日本四つの特徴」のひとつに、「アニミズムの文化（自然崇拝『しぜんすうはい』と自然信仰『しぜんしんこう』）」を取り上げていらっしゃいます。

まさに、日本人らしい心ではないでしょうか。目には見えないけれど何か大きな力を尊ぶ、自然崇拝、豊な自然の恵みに感謝する自然信仰を忘れてはならないと思います。

◇さて、これからも、すこしは、「エクスプレス」となるよう、早い発行を心がけたいと思います。ルーズベルト大統領は、「最初に月を取りに行け、たとえ取り損ねても、そこから星を目指す事が出来る。」とおっしゃいました。その言葉にあやかり、勿論、当然のごとく、百号を大目標にしますが、次の五十一号、五十二号と着実に歩んで参ります。今後とも、宮司プレスを宜しくお願いします。暑さに負けずお体大切にお過ごし下さい。

第五十一号

暦の上では、立秋を過ぎましたが、屋根が銅版の社務所の室内は、午前中で三十五度を越えますので、午後からは、空調設備の力を借りています。残暑、殊（こと）のほか厳しいですね。八月の別名を葉月と云うのは、木々の葉が黄色に色づき落ちる月、「葉落ち月」「葉月」が訛（なま）ったからだそうですが、季節の移ろいを少しも感じさせない、連日の猛暑日ですね。汗かきの私は、いつも、「手ぬぐい」を八つ折にして、白衣の懐（ふところ）にしのばせ、汗を拭いたり、手を拭いたりしています。手入は、洗剤を使わない、水洗いのみなので、環境にも配慮が出来て、自ら洗って干しています。現在、十六枚　程コレクションしていますよ。金魚や花火や蚊取り線香など夏らしいデザインや、様々な文様のものなどです。洗うたびに、色落ちしたり、色が他の文様に移ったりと、新鮮な発見があり、手洗いも苦になりません。

◇「手ぬぐい」は、手をぬぐうから手ぬぐいと思われがちですが、その「手ぬぐい」の起こりは、ちょっと違います。古い武将の絵姿を見ると、武将は立烏帽子（たてえぼし）をかぶり、正面から後へ むけて白い布を巻き、縛（しば）った余りを後に垂れ下げています。烏帽子が飛ばないように、布を巻きつけいるように見えますが、実は、これは、神に仕えるときの神聖（しんせい）な身なりにならって、白い布を巻く事によって魔除（まよ）けや、神様から賜る力を強くしているのです。向こう鉢巻（むこうはちまき、前側に結ぶ）を武将がすると、敵の矢を受けないという信仰もあり、鉢巻は、一種の魔除けの道具、「まじない」の意味を持っています。これが、「手ぬぐい」の起源です。その白い手ぬぐいは、神聖なもの、むやみやたらに使ってはならないものとなります。それで、白い手ぬぐいを一般的に使わないで、模様をつけることがはじまりました。模様があるから、「神にたいして使う、神聖な手ぬぐいではない」という事を示します。これが、私もいつも使っている「染（そ）め手ぬぐい」の起源です。白に対する神聖感、神に仕える神聖な衣の一部という意味が、形を変えて、頭に巻く布から、手をふいたり体をふいたりするものになっていったのでしょう。私は、家では、その起源のとおり、「染め手ぬぐい」を頭に巻いて過ごしています。

◇前置きが長くなってしまいましたが、先月の夏越祭も、天候にも恵まれ無事に厳（おごそ）かに執（とり）収（おさ）めました。心から感謝申し上げます。

◇先日の八日の日曜日には、彦島地区の五つの小学校から、二六名のお子さんが参加され、第五回の「まほろば学級」を開催しました。今回も昨年に引き続き、自作の「行灯（あんどん）」による「行灯行列」や、萩原秀信さんによる「紙芝居」の上演、私も、「宮司の話」と題して講話をしました。今年は、特に、西日本童謡協会の常任幹事の浜美由紀先生をお迎えして、「みんなで歌いましょう！」と童謡に親しみました。八幡さまで過ごした夏の一日が、「生涯消えることのない」と云えば少し大げさですが、そんな「感性（かんせい）」、「センスオブ　ワンダー」になって欲しいという思いで開催しています。敬神婦人会の皆様には、昼食のカレーの調理、維蘇志会の皆様には、終日お子様のお世話、ミート山口さんには、夕食のお世話、快く講師をお引き受け下さった前述のお二方、沢山の方々のお力添えで運営されました。感謝申し上げます。参加したお子様にとって、この八幡宮が、素晴らしい場所という意味の古語（ご）である、「まほろば」になって欲しいと思います。私は、「宮司の話」の講話で、人間の理想像について話しました。

◇人間の理想は、「仁（じん）」と云いますが、これは、中国の孔子の教えです。宮司プレス二十三号（平成二十年四月号）に、詳述（しょうじゅつ）しています。その理想像である「仁」になるためには、四つの心が必要で、その一つが、「恕（じょ）」という、自分がされて嫌（いや）な事を相手にしないという気持ちで、その事を強調しました。参加したお子様から、感想文が届いていますが、「仁」や「恕」が印象に残っているというお子様もいらっしゃって、大変嬉しく思います。やはり、どんなに難しい事でも、情熱を傾けて、きっとわかってくれる事を信じて話せば、印象に残る、感性になるのだと実感しました。「ワンダー」になってくれたのでしょうね。また、その思い出を参加させてくれた御家族の方に、詳しく楽しそうに話してくれたでしょうか。

◇実は、家庭と就職の関係を示す調査結果では、就職の内定を得ている大学四年生のうち、「家族との会話が多い」と答えた割合が、内定を得ていない学生を含む全体の平均より高いそうです。家庭の持つ影響力の一つに、「コミュニュケーション力」の向上があって、その事が就職活動や面接試験等にプラスに働いているのでしょうね。家庭の影響力は、それだけではなくて、家事や育児や介護など、報酬を求めぬ働きを経験する場で、奉仕の精神を育む場です。社会で最少の団体である家庭の力をつける事が、運命共同体としての地域社会の絆を強くするのではないでしょうか。小林一茶の句に、「うたたねに叱りてのなき寒さかな」というのがあります。「そんなところで寝ていたら風邪ひくよ」といってくれる人のいない寂しさを表しています。そんな優しい気づかいのある家庭を築きたいものです。御自愛下さいませ。

第五十二号

ようやく、日中の暑さもやわらぎましたし、朝早く御社殿までの道のりを歩きますと（ちなみに、百二十歩程度で到着します！）、松虫の鳴く声が耳に入り、冷ややかな風がよぎります。まるで、空調設備がよく効いている部屋のようで、とても涼しく感じます。これが、当たり前なのでしょうが、秋の気配をクーラーの涼しさに例えてしまうくらい、過酷な猛暑の日々だったのですね。

◇九月は、「ながつき」といいますが、まさに「夜長月（よながつき）」の事でありますね。もちろん、一番夜が長いのは、冬至である十二月二十二日でありますが、過ぎ去った夏の日々に比べると、朝明け（あさあけ）がゆっくりで、夜の帳（とばり）が急ぎ足となって、夜が長いのであります。そんな、秋の夜長に、作家の「葉室麟（はむろりん）」さんの最近の著作で、松本清張賞を受賞された、「銀漢の賦（ぎんかんのふ）」なる本を読破しました。江戸時代の太平な世の中で、ある藩の公正な政治、民の生活を慈しむ治世（ちせい）の為に、武士二人と町人一人の、男の友情を、命を懸けて貫いた物語でした。目頭が熱くなり、嗚咽（おえつ）が止まらず、閉口しました。

◇読書は、読みながら情景を思い描きながら、心に残像を刻みこみつつ、ページを進めます。

登場人物が多いと、紙に人物相関図（じんぶつそうかんず）をメモしながら読み続けます。やはり、読書によって得られた残像を大切にしたいと思いますし、将来を担う青少年にも、いい残像を刻んで欲しいと思います。

◇読書は字を読まなければなりませんよね。

日本語は、大きな国語辞典で見ると、十七万語入っているそうです。これは、英語の辞書ウェブスターの六倍にあたるそうで、日常日本語は約二万ちょっとで、日常の会話では四千語ぐらい使っているそうですよ。この膨大なことばの数は、世界だそうですね。文字数や語数が多いということは、意志や情操（目には見えない心情）の伝達が正確であるわけです。逆に数が少ないエチオピアの国では、フランス人を雇って、エチオピアの語彙（ごい）と読み、ことばのこと）を増やす取組をされました。留学しても、もともとことばが足りないので、そのことばの意味がわからなかったのですね。

実は、江戸時代に来日したオランダの医師がびっくりしたのは、解剖（かいぼう）用語が全部、日本語にあったそうです。三百の骨の名前とか、臓器、器官の名前が全部、江戸時代にそろっていて、日本人にちゃんと知られていたことを、オランダの医師が驚嘆（きょうたん）したのです。

◇日本人は、実は、語学の天才であって、伝統的な日本語の上に、漢字を使っていまして、名詞の半分以上は、漢字ですし、明治以後は、ヨーロッパの言葉、そして、戦後は、アメリカの言葉が、日本語になり語彙を多くしてきたのですね。多くの言葉を知っているということは、前述しましたように、意志伝達が確実に正確に行われるわけでありまして、科学の基礎を支え、哲学の思考のもとを支え、文化の基礎を支えてきたのです。明治以降の日本の近代化、西洋の列強に、急速に追いつき肩を並べた大偉業は、この、「ことばの数が世界一」であるからこそ、成し遂げられたといっても過言ではありません。

◇漢字は、象形文字（しょうけいもじ、物の形をかたどったもの）ですが、仮名（かな）というものは、本来、表音文字（ひょうおんもじ、おとをあらわす）であります。日本語は、漢文と文法の構造が違いますので、漢字で表現しようとすると、どうしてもその間に送り仮名を入れないといけません。助詞や助動詞を入れるためには、表音文字が必要で、漢字から漢字の発音をとって、仮名を発明しました。その仮名の草書体（そうしょたい、くずし字の事）が、「ひらがな」で、楷書体（かいしょたい、くずさない字）が、「カタカナ」です。「万葉集」には、万葉仮名（まんようがな）が、使われていましたので、すでに五世紀頃には、漢字を仮名にしたようです。

◇人間の心は、目に見えません。見えない心を形にしたのが、言葉です。従って、私は、目には見えないけれども尊い神様への感謝の心、神様へのお誓いといった「言霊（ことだま）」を作文します。「祝詞（のりと）」といいますが、やはり、送り仮名は、万葉仮名を使っています。千五百年前の言語を使って、神様への奏上の言葉を作文ができる、不思議な気持ちになると同時に、身の引き締まる思いがします。

◇三百年前のシェークスピアの言語を今の英語では読めません。ちなみに、ラテン語は「デッドランゲージ」で永久に変化しない言葉です。

万葉仮名まじりの祝詞は、参拝者に瞬時に、理解をして頂くことは、難しいかもしれません。やはり、我々神職は、神様と人の「仲取り持ち」でありますから、祭典後に、祝詞の簡潔な現代語訳と解説をする事も、怠ってはならないと、あらためて感じています。ことばの変遷は、特に、現代社会においては、「ことばの乱れ」という、大いに関心のあることです。しかし、成長中の言語であるから、各時代ごとに大きな変化をとげてきたわけで、日本人が生き続ける限り、宿命なのかも知れません。祝詞では、神様に奏上する前と終りには、必ず、「恐み恐み（かしこみかしこみ）ももうす」と奏上します。「恐れ多くも、大神様に申し上げます。」と奏上するのでありまして、その謙虚さ、感謝の心を表した言葉は、忘れる事のないよう御奉仕申し上げたいと思います。「流行が不易を浸食する、価値観が流動的」な現代であればこそ、変えてはならない大切な言葉があるはずですよね。生きている言葉だからこそ、大切にしたいものです。

彦島八幡宮　検索

第五十三号

十月も半ばとなり、日中は、汗ばむほどの陽気なのですが、朝夕冷え込みますね。この寒暖の差と、夜のしじまが早く降りてくる昨今、まさに中秋であります。

◇一年で二番目に美しいとされる「お月見」、何という月で、いつ見ることが出来るかご存知ですか。もちろん、二番美しいとされる月は、「仲秋の名月」で、旧暦の八月十五日で、今年は九月二十二日でした。

一年で二番目に美しいとされる月は、「十三夜月（じゅうさんやづき）」で、旧暦の九月十三日で、今年は、今月の二十日です。昔から、この両方の月を見て、愛（め）でないと「片見月（かたみづき）」といって縁起が悪かったそうです。「仲秋の名月」は、音楽を奏で、宴を催す宮廷貴族の年中行事でした。それに対して、「十三夜月」は、月に宿るとされた水の神様に、里芋や果物等をお供えし、感謝する、庶民の信仰の行事でした。その感謝を捧げる行事の、「十三夜月」を忘れないために、「片見月」といったのでしょうね。

ご承知のとおり、潮の満ち干きは、月の引力によるものですが、昔の方はすごいですね、月の働きがわかっていて、月に水の神様が宿ると考えたのですから。

◇十月は、「神無月（かみなづき）」といいますが、これには諸説ありますが（宮司プレス第四十一号、昨年の十月号には詳しく記載しています。御参照下さい。）、「無（な）」は、六月の「水無月（みなづき）」の「無（な）」と同じく、現代語の連用形である「の」と同じ意味でありますから、「神の月」「神祭る月」であります。

今月の四日～五日は、六連島八幡宮、九日～十日は、田の首八幡宮の例祭を奉仕しましたし、いよいよ明日と明後日は、本宮の例大祭です。感謝の真心を捧げ、厳かに遺漏なく御奉仕申し上げたいと思います。

◇吉田松陰先生は、「人は禽獣（きんじゅうと読み、けもの、動物のことです。）と異なることを知るべし」と仰（おっしゃ）っています。動物は、我欲（がよく）が体を支配しています。食物連鎖（しょくもつれんさ）や、弱肉強食（じゃくにくきょうしょく）ですよね。人も動物と同じように、欲求が体を支配したら、大変です。諍（いさか）いや争いの耐えない、しかも知能を駆使するわけですから、想像を絶するような状態になるでしょうね。

しかし、人には「心」があります。その「心」が、自分勝手な欲求やわがままを抑制して、体を支配し、動かしているのです。人の心には最初は自分しか住んでいないそうです。成長するに従って、家族やかけがえのない人やたくさんの人が住みついて、相手の痛みがわかる優しい、思いやりのある心になるそうです。一生、自分しか住んでいない心の持ち主、これが、禽獣ですよね。欲求に心が打ち克つ、これが、宮司プレス四十九号に記載した「抑止力」で、人が禽獣と異なるところだと思います。

◇私は、さらに、その「抑止力」をアップするには、神様の心に近づき、神様の宿る心にならなければならないと思います。そのためには、日々の「敬神（けいしん）崇祖（すうそ）」、神様を敬い祖先を尊ぶ心が大切だと思います。

「祈りは欲を浄化する」のでありまして、祈りは、まさしく、清めであり祓（はらい）をする、これこそが、「祭り」であろうと思います。日々の祭り、月毎の祭り、季節の祭り、一年に一度の祭りによって、心を清めて神様の心に近づき神様の宿る心が体を支配し、動かす、まさしく敬神生活（けいしんせいかつ）なのですね。

◇「朝」という漢字は、左側は、「十」「日」「十」、右側は、「月」です。これを並べ替え、「十月十日」、これを「とつきとうか」と読むのです。私ども人間の命の誕生は、母親の胎内の中で、何十億年かけて人類が進化したプロセス（過程）を、たったの「十月十日（とつきとうか）」で行ってしまうという奇跡だといわれています。その生命誕生の奇跡やかけがえのない命の大切さを表しているのが、「朝」という一文字の漢字です。朝が大事なのは、自分や大切な人の命を確認し喜び合う瞬間だからです。そして、どんな事があっても、必ず朝は来ると信じる事は、前向きな人生にもつながると思いますね。

◇今月は、「十三夜月」も忘れずに愛でて、清らかな朝を迎えつつ、心の清め祓いの祭りを厳かに奉仕して、「片見月」ならぬ「片手落ち」にならないよう努めます。皆様にも、いつもかわらぬ清らかな朝が、毎日、訪れますよう、心から、お祈り致します。

第五十四号

境内の神池西側にある桜の霜葉（そうようと読み、霜にあたって紅葉した葉の事です）も落ち始めました。夕風が、肌寒く身にしみる昨今となり、初冬を迎えています。

◇さて、紅葉とは、秋に葉が紅（くれない）に変わる事であり、また、その紅に変わった葉の事ですよね。どのようにして、葉が、紅に変わるかご存知ですか。実は、葉の細胞の中のアントシアンが増して、葉緑素（ようりょくそ）が、分解するために起こります。「カエデ」や「ウルシ」や「ツタ」など、境内の桜もそうですね。黄葉は、黄色に変わる葉の事で、これも葉緑素が分解して、黄色色素（カロテノイド）が、残るために起こります。「イチョウ」がそうです。この紅葉の事を「もみじ（紅葉）」といいますが、平安時代までは、「黄葉」とかいて「モミチ」と清音（せいおん、だくてんのない事）で読ませていました。平安時代以降に、「紅葉」と書いて「もみじ」と、にごって読ませたようです。「もみじ」は、「カエデ」の別の呼び名でもありますが、紅葉（もみじ）のついた言葉は、沢山あります。ちなみに、「紅葉葉（もみじはの）」という言葉は、「朱（あけ）」にかかる枕詞でして、紅葉は、紅の色も表しているのです。例えば、「紅葉鍋（もみじなべ）」、これは、鹿の肉の鍋のことです。鹿には、「もみじ」の木が、よく取り合わされました。花札の鹿の絵には、「もみじ」があしらってありますよ。「紅葉和（もみじあ）え」、これは、赤みのある和え物です。下関の「ふくさし」に欠かせないのが、「紅葉（もみじ）おろし」です。

◇「竜田揚げ」も、「紅葉」に由来する事は、ご存じでしょうか。赤く揚げるので、「竜田揚げ」と言うのですが、京都の紅葉の名所である「竜田川」から名づけられています。私どもの装束（しょうぞく）の紅の狩衣（かりぎぬ）の裏地は濃い赤ですが、これを「紅葉襲（もみじかさね）」といいます。

◇このように、我々の先人達は、「紅」「朱」「赤」という色を好んだようで、述べてきたように、生活の中にその「紅葉」という言葉が息づいていますよね。社殿や鳥居が、「朱塗（しゅぬ）り」の神社も数多くありますし、当宮でも神様へのお供物を載せる台（三方《さんぼう》）と言います）も、「朱塗り」です。

◇さて、なぜ、紅や朱という色を好まれたのでしょうか。私は、神様への真心、誠心である、有難いという「敬いの心」や、お蔭様でという謙虚な「へりくだりの心」を色に表すと、鮮やかな紅になるのではないかと考えています。うそやいつわりのない真心や誠の心の事を、「赤誠（せきせい）」や「赤心（せきしん）」と言うではありませんか。その赤という色もそうですが、その真心を神様が喜ばれたのだと思います。

◇日本人は古来より、「心には神が宿る。それは、まさに鏡であり、その心の鏡を磨いてその鏡が澄み渡った時に、心は神に通じる。」という思いを大切にしてきました。鏡は、すべての事を正しく写し出す、公平で正直という象徴です。「心の鏡」とは、「お天道様の罰（ばち）があたる」「御先祖様に申し開きが出来ない」、自分で自分を浄化するという、自浄のシステムを正しく機能させるものですね。そのシステムとは、ひとつには、「自分の心を照らす精神」、自分の心を正しく写し出す、うそや偽りのない公平さです。そして、「善悪を判断する基準」、これは、先月号にも詳しく述べました、心が、欲求を抑え体を支配して行動するという、日本人の抑止力にもつながる良心です。さらに、「生きていく上での基準」、内なるモラル、道徳です。これが、神様の宿る「心の鏡」ではないでしょうか。

◇日本国の大きな鏡は、平成二十五年に御遷宮（ごせんぐう）を迎える伊勢の神宮様であり、日本人の大きな鏡は、常に「国安かれ民安かれ」と祈りを捧げられていらっしゃる天皇皇后両陛下を始め、御皇室の存在であります。地域の鏡は、氏神様、家庭の鏡は、神棚様と御先祖様ではないでしょうか。このように、我々は、大きな鏡に写し出されて守られているのです。ですから、心の鏡を磨き澄み渡らせる努力、「朝に祈り、夕べに感謝」という敬神生活を忘れてはならないと思いますね。

◇霜葉を落としている境内の桜ではありますが、来春には必ず花を咲かせます。しかし、人の命は一世限りであります。だからこそ、限りのある命も、常に若々しく瑞々しく清らかな、「常若（とこわか）の命」に変える大きなエネルギーを持ち続けるためにも、日々、「心の鏡」を磨いて、「もみじ葉」のような鮮やかな真心で生活をしたいものです。

その営みの積み重ねが、「日々是好日（ひびこれこうじつ）」、平和で穏やかな日々になるのだと思います。

御自愛を心からお祈り申し上げます。

社務日誌抄（下半期）

―平成二十一年七月～十二月―

七月九日
▼兼務社 六連島八幡宮七社祭

十五日
▼末社 竹の子島天満宮例祭

二十三日
▼兼務社 六連島八幡宮夏越祭
戸別祓い

二十四日
▼兼務社 田の首八幡宮夏越祭

二十五日
▼敬神婦人会境内清掃

二十七日
▼茅ノ輪奉製

二十九日
▼本宮夏越祭前夜祭

三十日
本宮夏越祭御神幸祭

三十一日
▼末社 海士郷恵美須神社夏越祭

八月八日
▼まほろば学級

九月一日
▼下関唐戸魚市場㈱参拝

十日、十一日
▼摂社 若宮神社例祭
奉納平家踊り

十八日
▼下関市老人大学参拝
＊柴田宮司記念講演

二十三日
▼秋分祭秋季祖霊祭

▼末社 貴布禰神社例祭

三十日
▼サイ上リ神事神役協議会

十月四日
▼兼務社 六連島八幡宮例祭前夜祭
湯立神事

五日
▼兼務社 六連島八幡宮例祭本殿祭御
神幸祭

九日
▼兼務社 田の首八幡宮例祭前夜祭

十日
▼兼務社 田の首八幡宮例祭本殿祭御
神幸祭

▼敬神婦人会境内清掃

十五日
▼舞子島八幡宮例祭

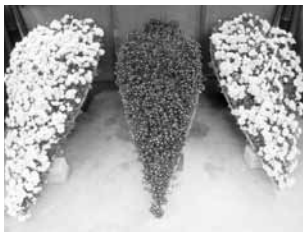
十六日
▼本宮秋季例大祭前夜祭

十七日
▼神嘗奉祝祭

▼本宮秋季例大祭本殿祭御神幸祭
山口県無形民俗文化財指定「サイ上
リ神事」斎行

▼リバース彦島歴史ウォーク開催

十一月二日
▼老三町 長崎興幹氏
菊花奉納



三日
▼明治祭

十五日
▼七五三祭

二十三日
▼新嘗祭
▼責任役員総代会

二十五日
▼兼務社 六連島八幡宮新嘗祭

十二月三日
▼祈漁祭

五日
▼大注連縄奉製
▼神社関係団体忘年会

十一日
▼氏子青年・維蘇志会神恩感謝祭、
忘年会

二十三日
▼天長祭
▼正月臨時巫女奉仕者説明会

三十一日
▼大祓式
▼除夜祭

まほろば学級 寄稿感想文

去る平成二十二年八月八日（日）、「まほろば学級」を開催致しました。

情操教育の一環として、下関市教育委員会の後援のもと開催致しましてお蔭様をもちまして第五回目を迎える事が叶いました。改めまして趣旨ご賛同賜りました関係各位の皆様方に厚く御礼申し上げます。参加児童から寄せられました感想文を掲載させていただきます。

彦島地区の小学校を通じて、夏季休暇前にご案内状を配布しております。一日という短い時間ではありますが、氏神さまの境内、鎮守の杜で楽しい時間を過ごしてみませんか。例年、八月第二日曜日に開催しております。

『楽しかったまほろば学級』

まほろば学級に参加しました。あんどん作りやバーベキューなど思い出に残る事がたくさんありました。中でも私は、一番あんどん作りが楽しかったです。作る前は失敗しないかと不安ばかりでしたが、色々な絵を描いたり塗ったりする所が思ったより上手くできてよかったです。神職さんやお手伝いのおじさんたちが親切に教えて手伝ってくれたので、とてもうれしかったです。おかげで上手に出来上がりました。

（手水の作法の練習）

夕方は、バーベキューと花火をしました。お父さんお母さんや姉も参加しました。うれしかったです。肉や野菜やとうもろこしが美味しかったです。焼きそばもありたくさんの量でした。お腹が一杯になりました。食事と食後には、皆で神様に感謝する言葉を述べました。花火は音が鳴って気づいたのでビックリしました。打上花火もきれいで、とても楽しく過ごせました。

柴田宮司に『宮司のはなし』をしてもらいました。『仁』と『礼』の話の内容でした。仁とは人間の理想の姿だそうです。仁になるには自分に負けない、自分が嫌だと思うことは相手にはしないようにする、正直、うそをつかない事だそうです。私も仁になれるようにがんばりたいと思いました。礼はあいさつだそうです。あいさつは、人と人とがふれあうこと言葉だから、あいさつを毎日しようと思う。

最後に、まほろば学級に行って本当によかったなあと思いました。日頃、八幡さんに行くことがあまりなかったけど、気持ちよくなれて楽しくすごせました。また、来年も行きたいなと思いました。

（竹中悠華）

（あんどん作り）

（閉講式～修了証授与式～）

『神社・お祭りの自由画コンテスト』入賞者の発表

過日、開催されました『第十八回神社・お祭りの自由画コンテスト（山口県神社庁主催）』に応募されました下関市立西山小学校・第一学年の米山昂我さんが多数の応募者の中より選ばれ、金賞の栄誉に輝かれましたのでご報告申し上げます。

毎年、彦島地区の小学校対象に夏季休暇前、コンテスト応募のご案内を致しております。彦島地区以外の山口県内の小学生の皆様は、次年度以降、氏神神社（うじがみじんじゃ）や山口県神社庁（TEL〇八三-九二二一-〇五〇六）にお問い合わせ下さい。

茅ノ輪枠奉納のご報告
～夏越の大祓式～

去る平成二十二年五月十三日にサンセイ㈱下関工場様（下関市彦島本村町）から夏越の大祓式（茅ノ輪くぐり）を前にステンレス製の茅ノ輪枠をご奉納賜りましたのでご報告申し上げます。

後日、総代や氏子青年会の皆様方と共に、茅やヨモギにて見事な茅ノ輪を奉製致しました。

とこわか奉納会発足のご報告

去る平成二十二年十月十七日（日）当宮秋季例大祭に、地元彦島にてご活躍されておられます会社の皆様方**【㈲もずくセンター、㈲マルイチ彦島醸造工場、㈱美栄水産、三池屋、農水フーズ㈱、㈱厳流本舗、㈱ダイフク、桃歳水産㈱　順不同敬称略】**計8社から地元の名産品をご神前にお供え賜り、ご祭神もさぞやご満悦の事と拝察した次第です。地域産業の活性化の一環として『とこわか奉納会』と命名され、更なる商売繁盛と隆昌さらには新たな商品開発と地域産業の発展を祈念されました。

ちなみに…「とこわか」とは漢字で「常若」と記し、常に若々しく常に瑞々しくありたいと願う永遠性を求める神社神道の理念のことです。とこわかの精神で一日一日を大切に、常に大神様によろこんでいただくために祭りの心を育みたいと一同決意もあらたでした。

大注連縄の奉製のご報告

去る平成二十二年十二月五日（日）、当宮総代、氏子青年会、敬神婦人会総勢六十名奉仕の下、拝殿大注連縄の奉製が執行され、本年刈り取って干した稲藁を使用し、青々しい立派な大注連縄が掲げられました。神域と外界とを隔てる大変重要な縄である為、境内摂社、祖霊殿、社務所玄関等全て注連縄は新しく奉製致しました事をご報告申し上げます。毎年、師走の第一日曜日に執行し、恒例行事になっております。

神道豆知識

「注連縄の起源」とは？

『古事記』に天照大御神様が須佐之男命の乱暴を畏れ天の岩戸にお隠れになられた時、「手力男之神、天照大御神ヲ天之石窟ヨリ引出奉リシ時、布刀玉之命、尻久米縄ヲ以テ、之ヨリ内ニ還リ入リ給フナカレ」と記載があるように、天照大御神様を二度と天の岩戸に入れないようにと、布刀玉之命が塞いだ尻久米縄（しりくめなわ）が起源とされています。

彦島八幡宮オリジナル祭事暦（こよみ）

数に限りがございますので、ご希望の方はお早めに、社務所までお問い合わせください。

（タテ六十三㎝／ヨコ四十六㎝）

節分祭のご案内

平成二十三年二月三日（木）

□厄除祈願・その他諸祈願／
午前八時三〇分～午後七時
㊟注節分祭神事斎行中は御祈願祭を停止致しますのでご了承下さい。

□神　事／午後五時三〇分

□豆まき／●第一回　午後五時〇〇分
●第二回　午後六時〇〇分
●第三回　午後七時〇〇分
（＊午後六時四十分より本殿にて祈願祭）

※三回目の豆まきは、年男女（卯年廻り年）・厄年・年祝い【＊下図参照】に該当するご参拝の皆様方にも本殿にて厄除祈願祭斎行後、豆まきをご奉仕していただけます。

※節分祭当日、**午後五時～六時三〇分**の間に社務所受付にてお申込下さい。

〈初穂料五千円〉

一年の無事と皆様方の厄除け開運を願い、平成二十三年の節分祭を執行致します。ご家族お揃いにてご参拝下さい。

◎行事、その他催しについてはポスター、ホームページをご参照下さい。

【注意事項】本年より、どんど焼きは**一月十六日(日)**に執行致しますので、節分祭当日は執行致しませんので予めご理解ご了承下さい。
正月飾等はどんど焼き当日迄に当宮までお持ちより頂きお納め下さい。

《厄除・年祝・廻り年祈願祭のご案内》

※御祈願祭は全て数え年（一般的に満年齢+誕生日前2歳／誕生日後1歳）**です。**

厄除のご祈願は1年を通し受け付けておりますが、星回りの関係上なるべく、誕生日を迎える事関係なく新年（元日）から節分（2月3日）までにお祓いをお受けしましょう。

（厄年）

厄年は、古来より人生の転換期にあたり災いの多い年と言われています。

特に、**男性42歳・女性33歳は大厄の年**とされ、前後の年を含め前厄・本厄・後厄の3年間身を慎み、氏神様の御加護を願う年とされております。

御神前に静かに額づき、感謝と反省と今後の発展を祈り願う事に大きな意義があります。

厄を祓い清め、氏神様の強いお導きを頂き、大厄を大躍（厄）進、飛躍（厄）の年として下さい。

性別	年齢	前厄	本厄	後厄
男	25歳	昭和63年生（24歳）辰	昭和62年生（25歳）卯	昭和61年生（26歳）寅
	42歳	昭和46年生（41歳）亥	昭和45年生（42歳）戌	昭和44年生（43歳）酉
	61歳	昭和27年生（60歳）辰	昭和26年生（61歳）卯	昭和25年生（62歳）寅
女	19歳	平成６年生（18歳）戌	平成５年生（19歳）酉	平成４年生（20歳）申
	33歳	昭和55年生（32歳）申	昭和54年生（33歳）未	昭和53年生（34歳）午
	37歳	昭和51年生（36歳）辰	昭和50年生（37歳）卯	昭和49年生（38歳）寅

（年祝）

年祝いとは、長き年月神様から生かされて過ごす事が出来た事への感謝の気持ちを込めて行うお祝いの行事であり、家が栄え、自分も落ち着きを加えしみじみと御神恩に感謝申し上げます。

御家族揃ってお年寄りに感謝しお祝いをして労う事も大切な事です。

上寿祝	明治45/大正１年生（100歳）	数え年100歳のお祝い。
白寿祝	大正２年生（ 99歳）	百から上の一を取ると白になり、数で云えば99である。
卒寿祝	大正11年生（ 90歳）	卒は略字で卆と書き九十と読む。
米寿祝	大正13年生（ 88歳）	米は字をわけると八十八となる。
傘寿祝	昭和７年生（ 80歳）	傘は略字で 仐 と書き八十と読む。
喜寿祝	昭和10年生（ 77歳）	喜は草書で 𠮷 と書き七十七と読む。
古稀祝	昭和17年生（ 70歳）	「人生七十古来稀なり」の漢詩にもとづく。
還暦祝	昭和26年生（ 61歳）	干支が丁度一巡し、誕生の年と同じになるので本卦返りともいう。

（廻り年）

廻り年とは、自分の生まれた干支の年を指し、年男・年女として男女共通の厄年になります。

一般的にはあまり周知されておりませんが、生まれて初めての廻り年を迎える13歳は「十三参り」として特に重要な年として今日に伝えられております。

大　正　4年　／　昭　和　2年、14年、26年、38年、50年、62年　／　平　成　11年

鎮守の杜のパワースポット ～彦島八幡宮ペトログラフ岩～

近年、我国ではパワースポット巡りのブームが起っていますが、本来は聖地を意味し、自然崇拝にもとづく信仰の神聖な場であります。ここでは、当宮に安置されております、神聖な岩をご紹介いたします。

ペトログラフとは、英語でペトロ（岩石）、グラフ（文字／文様）であり、岩に掘り込まれたシュメール文字の事を指します。その文字が刻まれている岩をペトログラフ岩と言い、神聖な神霊岩として当宮境内に注連縄結界の中安置されています。

シュメール文字とは？世界最古の文明と言われているメソポタミア文明を起こしたシュメール人が大規模な運河や都市国家を形成してかなり高度な文明を築き文字を発明したと考えられています。世界で一番最初に発明された文字と言っても過言ではありません。

さて、近年ペトログラフ岩の調査研究が世界各地をはじめ我国でも日本ペトログラフ協会を中心に様々な角度から進められています。しかし、未だ解明に至っておらず、学術的には多くの見解があるのが事実です。

ただ、現在我国でもペトログラフ岩と思われる岩を安置している神社が少なくないのは事実です。日本ペトログラフ協会の調査によると、元来石版として文字を刻む為の岩であった事は否めないが、その後雨乞いや豊作祈願などの祭りが行われた際、ご神体として崇めたり、人が登ると祟るなどとして神聖な場所に安置したりと何らかの形で祭祀と密接な岩として変遷し今日に現存しているそうです。

最後に、ただ単に流行にのり、物見遊山でパワースポットを訪れるのではなく、先ずは自分を清く正しく身のまわりを清潔にし、日毎神様を祀り、ご先祖様を敬い、家族をはじめとして御神縁いただいた周りの人全てに感謝の気持ちを持つ事を実践した上で、御神威を戴く事が肝要だと思います。

＊ペトログラフ岩についての詳細はホームページをご覧下さい。

高杉晋作と彦島のご神縁

奇兵隊創設者でもある幕末の長州藩を代表する志士高杉晋作は、周知の通りでありますが、ここでは高杉晋作と彦島の史的エピソード（逸話）をご紹介致します。

今を去ること文久三年（一八六三年）～文久四年（一八六四年）に長州藩が前後二度にわたる欧米列強（英、仏、蘭、米）との武力衝突　いわゆる下関戦争（馬関戦争とも言う）において連合国の圧倒的な武力と砲撃戦力の前に和議（講話）を余儀なくされた際、全権大使であった高杉晋作が、①関門海峡の外国船の通航の自由、②石炭・食物・水など外国船の必要品の売り渡し、③悪天候時の船員の下関上陸の許可、④下関砲台の撤去、⑤賠償金三百万ドルの支払い【＊賠償金請求先は幕府】の以上五つの条件を受け入れて講和が成立しましたが、実は連合国側のイギリス提督クーパーは再三にわたり『彦島を租借したい』と領土の租借に言及し、六つ目の条件を申しでていたそうです。しかしながら、高杉は頑として拒み続け、結局はイギリス側が取り下げることになったそうです。事実であるならば、彦島は高杉のお蔭をもち香港のような期限付き租借といえども外国の領土にならずにすんだ、彦島にとり大変な恩人であると言っても過言ではありません。負け戦にして最善の外交だったのではないでしょうか。ただし、このやりとりは当時の文献資料が存在せず、後年に初代内閣総理大臣 伊藤博文の回顧録に記載があるものの史実としての信憑性は賛否両論あります。

しかし、高杉は下関滞在が長く、実際に彦島にも足を踏み入れている事は事実です。関門海峡の要衝としての地形的な利を心得ており、奇兵隊士等共に弟子待砲台、富観台（現在の末社 福浦金刀比羅宮鎮座地）をはじめ島内の台場を巡視されました。

八幡様の知恵袋　その二十三

シリーズ　伊勢の神宮式年遷宮について

日本人の心のふるさと、我国の総氏神様である伊勢の神宮【三重県伊勢市】では平成二十五年、第六十二回式年遷宮が斎行されます。二十年に一度斎行されます我国における最大最重要の行事であり、社殿・装束・神宝等を新しくする祭祀行事をシリーズで紹介しております。平成十七年から各祭祀行事が進行中で、平成二十五年には正遷宮（御神体の渡御）が予定されています。

今回は**立柱祭（りっちゅうさい）**です。

伊勢の内宮（皇大神宮＝皇室の祖神）、外宮（豊受大神宮＝衣食住の護り神）それぞれで、新しい正殿の柱を立てる儀式です。正殿（しょうでん、せいでん）とは、神社の中心・核となる建物を指します。神職による拝礼ののち、小工（こだくみ＝宮大工）によって十本の柱を木槌でうちかため、完成の無事を祈ります。建築の初めに際し、御柱（みはしら）を立て奉る祭で、素襖烏帽子（すおうえぼし）姿の小工（こだくみ）が四組に分かれてそれぞれの御柱の木口を木槌で打ち固め新殿の安泰を祈ります。

此の度の神宮式年遷宮では立中祭を平成二十四年三月に斎行予定です。

安産祈願祭・腹帯清祓のご案内

彦島八幡宮は別名『子安八幡』とも称され、安産の神様としても崇められております。

腹帯をお清めされ、安産祈願祭を斎行されますことをご案内申し上げます。

古来より戌（犬）はお産が軽いとされることから、安産については、戌の日が吉日とされ、帯祝いなどにはこの日を選ぶ風習が伝承されております。懐妊五ヵ月が過ぎた最初の戌の日を選ぶ地方が全国的に多く見受けられます。

＊平成二十三年の戌の日を表記いたしますのでご参照下さい。

平成23年戌の日

1月	7日㈮先負　19日㈬先負　31日㈮先負
2月	12日㈯仏滅　24日㈭仏滅
3月	8日㈫大安　20日㈰大安
4月	1日㈮大安　13日㈬先負　25日㈪先勝
5月	7日㈯友引　19日㈭友引　31日㈫友引
6月	12日㈰先負　24日㈮先負
7月	6日㈬大安　18日㈪大安　30日㈯大安
8月	11日㈭赤口　23日㈫赤口
9月	4日㈰友引　16日㈮友引　28日㈬仏滅
10月	10日㈪仏滅　22日㈯仏滅
11月	3日㈭大安　15日㈫大安　27日㈰先勝
12月	9日㈮先勝　21日㈬先勝

宮司講話会の御案内（毎月一日夕刻）

彦島八幡宮では、毎月一日《※元日を除く》に宮司講話会を開催致します。どなた様でもご参加できます。どうぞお気軽にお参り下さい。

【内　容】

①正式参拝

＊本殿にて、ご参列の皆様方をお清め致します。

②宮司講演

＊毎月宮司自ら編集発行するミニ新聞『宮司プレス』の読み聞かせを中心に講話致します。

③茶話会

＊簡単な直会（歓談）し、質疑応答や参加者相互の親睦を深めます。

④開始時間は夕刻ですが祭典行事等の関係上、定めませんので境内掲示板やホームページにてお知らせいたします。

＊社務所までお気軽にお問い合わせ下さい

【初穂料】お気持ちで結構でございます。

朝粥会（あさがゆかい）の御案内（毎月二十一日）

彦島八幡宮では、毎月二十一日《午前六時三〇分～七時二〇分頃》に朝粥会を開催いたしております。

彦島のまほろば（良き所、美しい所の意）で、清々しい朝をお過ごしになられてみてはいかがですか。

どうぞお気軽にお参り下さい。

【内　容】①本殿にてご祈願祭を斎行（＊誕生月該当者は全員玉串奉奠）

②宮司講話

③会館瑞鳳殿にてかゆを食す

【初穂料】お気持ちで結構でございます。

神前結婚式のご案内
日本の伝統「和の心」継承へ

～神道における最上の「産霊（むすひ）」行為～

鎮守の杜で美しく雅やかな結婚式を…

神前にて共に生きることを誓う、人生における最も重要な儀礼を、神聖な社殿で執行してみませんか。

披露宴会場も隣接の神社会館『瑞鳳殿』にて挙行できます。

※詳細は社務所までお問い合わせ下さい。

お食事・仕出し（弁当）はお任せ下さい

彦島八幡宮会館 瑞鳳殿の御案内

お友達やご家族との会食、披露宴、新年会、忘年会、歓送迎会、各種懇親会、年祭・法要等全てに対応しております。仕出し等の各種弁当もご用意できます。ご予算献立等詳細はご連絡下さい。完全予約制ですので予めご了承下さい。

（予約センター連絡先）

℡〇八三―二三四―〇七三二

※社務所にても受付けておりますのでお気軽にご相談下さい。

＊洋ホール二～一〇〇名様まで対応

＊和室十二畳（※六畳二部屋）

＊和室二十畳（※十畳二部屋）

［和室会席料理の場合＝定員三十五名］

平成二十三年上半期 祭事日程一覧（一月～六月）

▼一月

一日　歳旦祭

三日　元始祭

十一日　六連島八幡宮歳旦祭

十六日　どんど焼き

▼二月

一日　初午祭

三日　節分祭

十一日　紀元祭建国奉祝祭

十七日　祈年祭

※「としごいのまつり」稲作五穀豊穣を祈る

▼三月

十四日　南風泊恵比須神社例祭

二十日　春分祭春季祖霊祭

※家の宗旨が神道の方の合同の先祖慰霊祭

三日　竹の子島金刀比羅宮例祭

九日　六連島荒神祭

十六日　舟島神社例祭、佐々木小次郎慰霊祭

二十四日　彦島地区戦没者慰霊祭

二十九日　昭和祭

▼五月

上旬　塩釜神社例祭

十六日　福浦金刀比羅宮例祭

▼六月

十日　海士郷恵美須神社例祭

※神占神事において、彦島八幡宮夏越祭海上渡御の御座船（神輿をお載せする船）が選定される上旬貴布禰稲荷神社例祭（老町）

三十日　大祓式

編集・発行
彦島八幡宮社務所
下関市彦島迫町五丁目十二番九号
TEL〇八三―二六六―〇七〇〇
FAX〇八三―二六六―五九一一
ホームページ http://www.hikoshima-guu.net
平成二十三年一月一日
印刷・㈱ナカハラプリンテックス

彦島八幡宮　検索